鎌倉の桜　キリガヤ（桐ケ谷）

（令５．１１．１２.）

典型的なオオシマザクラ系の里桜。覆輪（花びらや葉の、外縁部分が地と違う色で縁ど）

『遺伝研のさくら』によると、「**桐ヶ谷**」は、鎌倉時代から記録があり、鎌倉材木座の谷戸・桐ケ谷にあったので「桐ヶ谷」の名が付いたといわれる。『新編相模国風土記稿』に、「〇桐谷 世に桐谷と稱する櫻の一種あり、もと此地に産せしなりと云ふ」と記されている。奈波道圓活所の『櫻譜』（１６４７年頃）に「桐谷は桜の第一と為す。色白くして微かに紅、… 原は鎌倉桐谷に出す」とある。１３５７（正平１２、延文２）年に足利尊氏により鎌倉から京へ運ばれ、御所の寝殿前に植えられた桜・左近桜はこの桜だという。一重の花（５枚の花弁）と旗弁をもつ６～８枚の花弁がある花が同じ木に混じって咲くので、極楽寺・宝物殿前にある北条時宗公お手植えと伝えられる「桐ケ谷」は「**八重一重**」と名付けられている。また、後水尾天皇が御車を引き返し一重か八重かを見られたことに由来するとされる「**御車返し**（ミクルマガエシ)」、嵯峨天皇があまりの美しさに２度３度御車を返して眺めた地主神社の「**地主桜**（ジシュザクラ)」も「桐ケ谷」の同種とする説がある。

「桐ケ谷」の所在については、『新編相模国風土記稿』に、「經師谷は、辨谷の北にあり。土俗ちゃうじが谷と云ふ。【東鑑】に、經師谷とあるのは此地の事なり。又此東の谷を桐谷と云ふ」とあり、「桐ヶ谷」は光明寺の北東に位置する谷戸か。『鎌倉古道』には、市の南東部・材木座にある光明寺から長勝寺のあたりと書かれている。明和から安永の頃に刊行された『鎌倉名勝図』に光明寺の背後に「桐ケ谷」の地名がある。『鎌倉の地名由来辞典』では、経師ケ谷の東側の谷戸としている。

「桐ヶ谷」は、近年まで鎌倉では、極楽寺と大船のフラワーセンターの２か所だけであったが、鎌倉同人会が創立１００周年記念事業としてこの桜の普及を目指し、平成２８年３月に鶴岡八幡宮境内と虚子立子記念館に、平成２９年６月に鎌倉文学館と永福寺跡地に、平成３０年３月に円覚寺と光明寺に、平成３１年２月に第二中学校と鎌倉警察署に、令和２年２月に鎌倉駅西口広場に、令和４年３月に建長寺と瑞泉寺の境内に、さらに令和５年３月に第一中学校と御成小学校にそれぞれ植え１３本となった。また、宅間ボランティアの会も平成２９年３月に旧華頂宮邸内に植樹している。

鎌倉由来の桜は、「桐ヶ谷」の後、鎌倉から京へ運ばれた大島系の淡紅色の八重の桜「**普賢象桜**」がある。突然変異で生まれ、２本の緑色の雄しべが象牙のように見え、普賢菩薩が象に乗っている様を連想するところから名付いたという。御所の北の相国寺の禅僧で足利義政の側近・横川景三（おうせんけいさん）の住居近くに植えられていたという。桐ケ谷桜よりも豪華で咲く時期も長いと景三は記録している。

その他、大船のフラワーセンターで昭和４４（１９６９）年に発見された「**玉縄桜**」がある。ソメイヨシノの自然交雑実生株から選抜育成された早咲きの桜である。